

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	倫理学における宮沢賢治 : その実践と思想の現代的意義
Author(s)	後藤, 雄太
Citation	ぷらくしす , 21 : 47 - 57
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/48974
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048974
Right	
Relation	



倫理学における宮沢賢治 —その実践と思想の現代的意義

Kenji Miyazawa's ethics: the significance of his practice and
thought to contemporary ethics

後 藤 雄 太 (広島大学・准教授)
Yuta Goto (Hiroshima)

序

本稿は、宮沢賢治の作品と実践を倫理的観点から分析することによって、その倫理思想としての特質を明らかにすることを目的とする。賢治はもちろん倫理学者ではないが、彼ほど「倫理を生きよう」とした実践的人物はそうそういない。にもかかわらず、倫理学の分野においてはさほど熱心に研究されてこなかった¹。その理由の一つとしては、「倫理を語る」人々、すなわち哲学者・倫理学者の思想を研究対象とするという（ある意味では不思議な）伝統が倫理学にはあることが考えられる。また、国体護持の思想の色濃い国柱会への入会²や戦中戦後に「雨ニモマケズ」が国策協力に利用されてしまったこと³に見受けられるような、賢治思想の危うい側面を懸念する向きもあるだろう。あるいは、「聖人君子」としての賢治というパブリックイメージに対する漠然とした反感や、「国民的作家」としての圧倒的な名声ゆえの「嘲り」も、軽視の背景にあるかもしれない。

本稿では、賢治思想の抱え持つ危険性には注意を払いつつも、「倫理を生きよう」とした彼の生涯と思想から、現代の倫理学が見過ごしてしまっているものを見出し、現代において切実に必要とされている<生きられた倫理>の姿を描き出す手がかりを得たい。

そのための具体的方法として、現代倫理学、特に英米系倫理学において分類される規範倫理学の三つの主要な立場、すなわち①功利主義、②義務論、③徳倫理学（および、近似した立場である共同体主義とケアの倫理）と賢治の倫理思想を比較考察することを通して、その特質を明らかにしていく。もちろん、規範倫理学の三つの主要な立場それぞれの中にも多様な争点があるので、あくまで最大公約数的・教科書的な基本思想との比較ということになる。

1 功利主義と賢治 —<ほんとうのさいわい>をめぐって

功利主義は「幸福」を倫理の原理とする立場であるが、賢治文学においても<ほんとうのさいわい>⁴が重要なキーワードとなっているし、何より彼の生涯が、人々の幸福を希求していく歩みにほかならなかった。また、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（13巻、9頁）⁵というよく知られた賢治の言葉に、功利主義における公益重視

の立場との類似点を見出すことも可能かもしれない（なお、この賢治の言葉が有する危険性については、第3節で言及する）。

ならば両者の相違はどこにあるのだろうか？ やはりそれは、両者の考える「幸福」の実質的内容にあるように思う。賢治が描き出す<ほんとうのさいわい>——この「ほんとうの」という修飾語それ自体が、一般的な「幸福」に対する批判意識をすでに予告しているが——それは、功利主義者たちが描き出す幸福とは随分と異なっている。

以下では、賢治の描き出す<ほんとうのさいわい>の特質を、彼の作品から三つに分類して抽出していきたい。

① 自然との交歓としての<ほんとうのさいわい>

この自分が、自然のなかへと溶け込んでいくこと、万象のうちへと還っていくこと、それに伴い湧き出る歓び、それこそは、賢治文学の根底をなす感覚の一つと言ってよい。

いま「自然」という言葉を用いたが、それは、賢治文学においては、単に動植物や鉱物など、人間に対立する存在者の領域のみを指すのではない。例えば、詩「小岩井農場」において、賢治はこう歌う。

すみやかなすみやかな万法流転のなかに
小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
いかにも確かに継起するといふことが
どんなに新鮮な奇蹟だらう（2巻、63頁）

かつて後期ハイデガーが、ギリシャ語の自然（ピュシス）という語に対して解釈したように、賢治において自然は、人間自身や人工物をも含む「万物」を指すと同時に、何よりそれら存在者が「いかにも確かに継起するといふこと」、すなわち<存在>それ自体、この世界が在ることそのものをも含意しているように思える。一方、例えばミルには、典型的に西洋近代的な自然観が見受けられる。すなわち、自然は人間に対立する単なる「対象」、しかも操作・支配すべき対象と見なされている（また、後に本稿でも言及することになる自然の根源的な「非知性」にも彼は鈍感である）⁶。

さらに、童話「虔十公園林」も見てみよう。主人公は、知的障害者らしき子ども、虔十である。その虔十は、「雨の中の青藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたゝいてみんなに知らせました」（10巻、103頁）、「風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方がない」（同上）。

このように自然と交歓しやすい身体をもった虔十——作者の賢治自身、農学校の教員時代、遠足などの折に突然「ホホホー」と奇声をあげて野を駆け回ったり踊ったりしたというエピソード7に見られるように、そうした類の身体を持ち主だったが——彼は、まさにそれゆえに、

他の子どもたちから、「足りない」人間として、嘲笑の的になっている。その度十が、ある日突然「家の裏の野原に杉を七百本植えたい」と父母に苗の購入を頼み、植えることになる。しかし、その土地は痩せていたため、杉は発育不良で背は低いままであった。また、度十は、枝打ちをやり過ぎてしまう。しかし、まさにそれら「失敗」ゆえに、たまたまその場は良い具合の遊歩道となり、近くの学校の子どもたちが遊び場として集まってくるようになる。子どもたちが遊ぶ姿を眺めることが度十の喜びとなった。その後度十は若くして亡くなるが、やがてその広場は「度十公園林」と名付けられ、周辺の開発が進む中、大切に保存されることになる。そして物語の終盤、賢治はこう語る。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本統のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした。(10巻、110頁)

かつて度十が感受していた自然との交歓、すなわち<ほんとうのさいわい>を、この公園林という場は多くの人々に贈与し続けている。度十という「足りない」子どもが、痩せた土地の「足りなさ」が原因で発育不良に陥った杉の「足りなさ」ゆえに、大きな恵みをもたらしたわけである——莊子の言葉を用いれば、「無用の用」が、この作品のひとつのテーマになっている。さらに重要なことは、度十がもたらした恩恵、すなわち「子どもたちの遊び場」もまた、例えば鉱脈のように生産主義的な意味において「役に立つ」もの、利益をもたらすものではないということだ。<ほんとうのさいわい>は、そんな位相に在る。

功利主義者たちは、こうした<ほんとうのさいわい>を、多種多様な「幸福」のリストの中の一項目として並列させてしまうかもしれないし、あるいはミルのように「快樂の質の差異」として理解してしまうかもしれない。しかし、それらのあいだには、いわば「存在論的な差異」がある。<ほんとうのさいわい>は、「自我」が抱く快苦の感情でもなければ、「自我」が実現を望んでいる対象でもない。それはむしろ、「自我」それ自体が自然＝存在へと融解したときに、はじめて立ち現れるものである。それは、この世界の<存在>そのもの、生きて在ることそれ自体を是認しているような根源的な力であり、「自我」が追い求める諸々の功利をそもそも功利として成立させているものである(例えば、生きて在ることそれ自体が根底的には肯定されていないのなら、そもそも様々な快や財を求め、獲得する動機が持てるだろうか)。その意味において、<ほんとうのさいわい>は、「自我」が感受したり判断する「幸不幸」の手前にあり、諸々の功利の根底をなすものである。

② 「非知なるもの」としての<ほんとうのさいわい>

以上に確認した<ほんとうのさいわい>の特質、すなわち「自我」が自然＝存在へと融解したときに、はじめて立ち現れるものであるという性質と深く関連して、賢治の言う<ほんとうのさいわい>のもう一つの側面が立ち現れる。例えば「銀河鉄道の夜」の終盤、主人公

ジョバンニは、「みんなのさいはひ」を探すことを友人カムパネルラに誓うが、その後こんな問答が続く。

「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」ジョバンニが云ひました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云ひました。(11巻、167頁)

<ほんたうのさいわい>—それは「わからない」ものでもある。その理由を存在論的観点から解釈するならば、<ほんたうのさいわい>は確かに存在しながらも、「自我」の知的まなざしからは身を隠すものだからである。それは、度十のような「足りない」子どもではない私たち賢しらな大人にとっては、そのままでは入っていけない領域にあるものだからである。それは、定義されえないもの、「本質存在」(essentia)として確定しえないもの、すなわち「何」とも言えないものであり、その意味で己を隠すことを好む自然=存在に属するからである。

「銀河鉄道の夜」において、こうした<ほんたうのさいわい>の非知性への言及の直後、必然的に登場するのが「石炭袋」である。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるやうにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくつとしてしまひました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんどあいてゐるのです。その底がどれほど深いかさその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずたゞ眼がしんしんと痛むのでした。(同上)

「石炭袋」「そらの孔」は、この世界の存在の<深淵>、無底を表す。それは、知の対象ではありえない<謎>であり、それがもたらす感情は、「ぎくつと」するような、ひとつの戦慄である。

<ほんたうのさいわい>は、功利主義者たちが考えるような、単なる快樂でも利益でもない。それは、存在への戦慄と不即不離のものであるからだ。<ほんたうのさいわい>は、計測できない。そもそも理性による計算の対象ではないからである。<ほんたうのさいわい>は、予測もできない。功利主義に対する批判者たちがしばしば指摘するような「将来の予測の困難」ゆえではなく、それは、すでに私たちの脚下に到来しているからである。<ほんたうのさいわい>は、比較不能である。それは単に、功利主義に対する批判者たちがたびたび言及するような「幸福感の個人間における相違」ゆえではなく、そもそもそうした「個人」が所有できる対象ではないからである。

③ 「追い求めるもの」としての<ほんたうのさいわい>

以上の第一、第二の特質と深く関わりつつ、賢治の描く<ほんたうのさいわい>の第三の特質が立ち現れる。それは、「追い求めるもの」としての<ほんたうのさいわい>である。「銀

河鉄道の夜」における「石炭袋」の描写後、ジョバンニは、こう決意を表明する。

僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。(同上)

ここでの「大きな暗」は、決して忌避されるべき対象ではない。単に「こわい」だけの場ではない。むしろ、その内へとわが身を放ち入れるべき場である。ここでの<ほんたうのさいはい>の追求は、通常幸福追求のように、現在の無の状態から将来に幸福を実現するというのではなく、むしろ、すでに到来しているもの、忘却されがちなもの——すなわち存在の充溢のうちへと還っていくことである。そして、それは、ひとたび到達されれば完結するものではなく、求め続けなければならないものである。なぜなら、それは、自我による所有や固定化を拒む深淵であり、謎であるからである。殊に、度十のように容易に存在の充溢のうちに安らぐことができる子どもでは最早ない私たち大人にとっては、強い意志によって、その頼りない幻影を手掛かりにしつつ、継続的に立ち返らなくてはならない、探し求めなくてはならない場である。

こうした思想は、「農民芸術概論綱要」においては、以下のように表明されている。

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである／われらは世界のまことの幸福を索ねよう
求道すでに道である（13巻、9頁）

ここでの「銀河系」は、本稿の文脈で言い換えるならば、自然、存在を意味する。自我の根底を突き破ってやってくる存在の声に耳を傾けること、それが賢治の倫理の根幹にある。そうした存在への応答こそ、「世界のまことの幸福を索ね」ることである。「求道すでに道である」のは、先述のように、<ほんたうのさいはい>を求めるということは終点なきプロセスそのものだからである。かくして賢治は言う、「永遠の未完成、これ完成である」（13巻、16頁）。

自我それ自身は、<ほんたうのさいはい>に到達することはないが、だからといって、<ほんたうのさいはい>は決して単なる幻でもなければ、意義なきものではない。譬えて言えば、それは北極星のようなものである。すなわち、私たちは北極星に到達することはできないが、北極星は、その瞬きによって、私たちの進むべき方向を示してくれている。<ほんたうのさいはい>は、己を隠しつつも、北極星のように、絶えず新たに私たちを実践の歩みへと送り出すだろう。

ところで、こうした<ほんたうのさいはい>の追求は、必ずしも「幸福」の追求を否定するような精神論的なものではない。現に賢治の倫理的実践の多くは、主に花巻の農民たちの「幸福」——特に経済的利益——を増大することに、ひとまずは向けられていたことを忘れて

はならない。しかし一方、賢治は、われわれ現代人のように、それら「幸福」の無際限な増大をよしとし、「幸福」の獲得それ自体を究極的な目的とすることはなかったこともまた明らかである。例えば、農学校における教育や羅須地人協会における活動は、単に農業に関する指導にとどまらず、必ず芸術活動をともなっていた。それは単に農作業の余暇に行われる趣味や気分転換ではない。賢治にとって芸術は、<ほんとうのさいわい>を垣間見せてくれるものであり、その<ほんとうのさいわい>こそは「幸福」の無際限の追求と目的化に陥らないように導いてくれるものであった——あたかも北極星のように。童話集『注文の多い料理店』の序は、こう始まる。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらみもたないでも、きれいにすきとほった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。／またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびらうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはってあるのをたびたび見ました。／わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。(12巻、7頁)

2 義務論と賢治 ——<かなしみ>という感情をめぐって

続いて、賢治の倫理思想と義務論、特にカント的義務論との比較を試みたい。

賢治といえば、生涯独身を通したことや(一時期ではあるが)菜食主義者であったこと等に見られるように、そのストイックさが際立っている人物である。また何より、彼は、何かに突き動かされるように倫理的に生きようとした人物である(特に後半生において、その傾向は顕著である)。こうした禁欲主義的傾向や自愛の否定、衝動的な使命感等という点においては、賢治の倫理は、功利主義以上にカント的義務論の方に親和的であるように思う。

それでは、賢治の倫理思想と義務論の相違点はどこにあるのだろうか。最も顕著だと思われる相違点は、賢治の倫理が明らかに「情的なもの」に基づいているという点である。このことは、まずは何より、賢治文学の根底にある自然との交歓をめぐる前節の論述から明らかであろう。

加えて、ここで注目したいのは、賢治の倫理においては、交歓だけでなく、<かなしみ>の情もまた、歓びと切り離しがたいものとして、大きな役割を果たしているということだ⁸

(<かなしみ>という、通常ならばマイナスのもの、不幸なものとして数え入れられる感情が重視されるという点は、功利主義と賢治の倫理との重要な相違点でもある)。よく指摘されるように賢治の文学世界の基調色は「青」であるが、その理由の一つは、賢治の情緒の基底には、いつも<かなしみ>が横たわっているためであろう。そして、賢治の実人生において、最も深い<かなしみ>をもたらした出来事は、妹・とし子の死であったが、その深い<かなしみ>は、賢治を倫理的な生き方の方へとより強く押し出すきっかけともなった。

とし子の死の翌年の樺太旅行と一連の挽歌の創作は、死んだとし子の「行方」を捜す旅でもあったが、詩集『春と修羅』における挽歌群の最後に収録されている「噴火湾(ノクター

ン)」では、こう歌われている。

ああ何べん理智が教へても／私のさびしさはなほらない
わたくしの感じないちがった空間に／いままでここにあつた現象がうつる
それはあんまりさびしいことだ／（そのさびしいものを死といふのだ）
たとへそのちがったきらびやかな空間で／とし子がしづかにわらはうと
わたくしのかなしみにいちけた感情は
どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ。（2巻、185-186頁）

愛する者の喪失と断絶、それが<さびしさ>や<かなしみ>の情を喚起し、「わたくしの感じないちがった空間」を示し出す。「銀河鉄道の夜」も、とし子の「行方」を捜す旅から生み出された作品群の一つだが、前節で言及した「石炭袋」「そらの穴」は、死という非知なるものの象徴でもある。それは、「いくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛む」ような無底であり、深淵であった。

ところが賢治は、こうした「かなしい」事態に対して、「噴火湾（ノクターン）」の約一年後（1924年7月17日）に創作された「薙露青」という詩——これは「銀河鉄道の夜」の前提稿とも言われているものであるが——の中で、以下のような矛盾めいた不思議な言葉を遺している。

あゝ いとしくおもふものが／そのまゝどこへ行ってしまったかわからないことが／
なんといふいゝことだらう（3巻、107頁）

ここでは、深淵を覗き込んだことによる不思議な転回が起こっている。否定から肯定への転回である。この不思議な転回を理解するための手がかりを与えてくれるのが、「薙露青」の下書稿に残された以下の記述である。

いとしくおもふものが／そのまゝどこへ行ってしまったかわからないことから／ほんたうのさいはひはひとびとにくる（3巻「校異篇」、246頁）

この下書稿では、<かなしみ>が、第1節でも問題にしてきた<ほんたうのさいわい>に結びつけられている。<ほんたうのさいわい>は、自然との交歓をその核の一つとして持っていた。それは、賢治も深く影響を受けていた大乘仏教哲学の用語によって表現するならば、相互依存の縁起ということ、すなわちこの宇宙のあらゆる物事は、互いに依りあって連なりつつ生起しているという真理を前提としている⁹。深淵から襲い掛かった<かなしみ>が、むしろ、自我の知によっては見渡せない時空の連なりを垣間見せ、むしろある種の普遍の方へと押し出している。この普遍を生きることは、とし子を実体として、個体として執着・愛着す

ることから離れていくことであるが、同時に、<この宇宙に遍在するとし子>と出会い直していくことでもある。

こうして賢治は、とし子の死をきっかけに、より強く<ほんとうのさいわい>を求めて、その倫理的実践を加速していくことになる。第1節でもすでに示唆されていたように、<ほんとうのさいわい>は、「みんなの」さいわいでもなければならない。虔十が贈与した「子どもたちの遊び場」を、賢治もまたもたらそうとしたのである。

以上のような賢治の倫理思想は、知の限界からむしろ倫理が導き出されているという点に限っては、物自体の不可知性から「普遍的法則」や「命令」として倫理の領域を確保するカント倫理学と類似している。しかし、賢治において倫理とは、普遍的法則への合致ではない。ヘブライズムの伝統とも無関係ではないであろう「法の無条件の順守」ではなく、賢治において倫理とは、仏教的意味における<法>——それはサンスクリット語では「ダルマ」という多義語であり、「存在」や「真理」をも意味するが——この宇宙の存在者の連なりの内へとわが身を放っていくことであった。

また、賢治において、倫理は単に個人的感情を捨てたところに実現するものではないし、もっぱら道徳法則への「尊敬」という感情のみが重視されるのでもない。むしろ<かなしみ>という情こそが、万物との連なりの世界を示し、実践へと押し出してくれるものでもある。宇宙の万物との交歓は、確かに歓びではあるが、その底には、「青い」かなしみが切り離されることなく、いつも揺れ動きながら寄り添っている。

なんべんさびしくないと言ったとこで

またさびしくなるのはきまつてゐる／けれどもここはこれでいいのだ

すべてさびしさと悲傷とを焚いて

ひとは透明な軌道をすすむ（2巻、88-89頁）

3 徳倫理学と賢治 ——宇宙の微塵となる

本節では、徳倫理学と共同体主義、ケアの倫理を、「徳倫理的立場」として、まとめて扱うことにする。なぜなら、これらの立場は、功利主義と義務論という近代的な倫理思想へのアンチテーゼとして登場したものであり、感情や身近な人間関係の重視という点で類似しているからである。

これらの立場は、賢治の倫理と親和性が高いように思える。すなわち、徳倫理的立場は、感情を重視するという点においては、賢治の倫理と親和的である。また、共同体主義的な志向は、故郷である岩手・花巻を愛し、地元の農民たちに尽くした賢治の倫理的生と重なるようにも思える。また、ケアの関係を倫理の根本に置くケアの倫理も、慈愛に満ちた賢治の人物像に親和的であるように思える。

一方、両者の立場の重要な相違点は、徳倫理的立場が、身内重視、内輪重視の閉鎖的性格を持ってしまいやすいのに対して、賢治の倫理は、すでに本稿で示唆されてきたように、

ある種の普遍へと自らを開いていく志向が明らかに強いという点である。賢治の倫理は、功利主義や義務論とは違った仕方で、徳倫理的立場に潜在する閉鎖的性格からの脱却の手がかりを与えてくれているように思う。

第1節で確認したように、賢治にとって倫理的とは「銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くこと」であった。それは共同体を超えて、宇宙全体にまで広がっていくようなスケールを持ったものであった。では何故、賢治は故郷を愛し、そこに留まり続けたのか？それは、賢治にとって岩手は、日本という平面上の隅にある「地方」ではなく、あらゆる存在者が互いに依りあって連なりつつ生起している場、すなわち全宇宙が映現する<イーハトーヴ>であったからである。この世界の片隅、すなわち自らが現に生きて在る<この場この時>という局所にこそ、むしろ普遍は宿る。だだっ広い「平面」だけを全世界と思い込んでいる人間の表象的まなざしには隠れているだけである。水平方向への移動、例えば東京やパリやニューヨークへの移動が「本当の人生」をもたらすわけではない。<この場この時>に映現する、より広大な世界へと解放されるためには、むしろ「垂直」方向に旅立たなくてはならない（「銀河鉄道の夜」は、水平方向にではなく、垂直方向を往き、還ってくる物語である）。

賢治の作品を読んでみれば容易に気づくように、そこで描かれる人間関係は、前近代的な共同体特有のベトベトとした一体感を欠いており、「孤独感」の方がむしろ際立っている。度十やジョバンニ、よだかをはじめとする賢治童話の主人公の多くは、「共同体」から孤立しているし、賢治自身の人生にも常に孤独の影が差していた。垂直方向へは、「共同体」のもたらす一体感のまどろみから覚め、ひとり行くことが求められるからである。

賢治思想における共同性は、個を否定・吸収することではない。彼における共同性のイメージを端的に表していると思われるのが、「農民芸術概論綱要」における以下の言葉である。

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう
しかもわれらは各々感じ 各別各異に生きてゐる（13巻、13頁）

この場合、個は個であるが、単なる実体的な個、近代的な個人ではなく、あくまで「宇宙の微塵」、すなわち宇宙のあらゆる存在者と連なって在るような個である。むしろ、そこにおいて各々の個ははじめて個として「かがやく」。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という同じ「農民芸術概論綱要」からの言葉は、賢治の倫理を象徴するものとして好んで引かれるが、全体主義的に解釈されてしまいやすいし、何より賢治自身が「自己犠牲」という極端な形の倫理へと傾斜してしまいがちな人物であった。しかし、その思想それ自体は「世界の幸福もまた、個人の幸福がなければありえない」とことと必ずしも矛盾しないはずである。世界と個人はあくまでも不即不離であり、相互依存しているものであって、実体として存在しているわけではない。一方の存在は他方の存在に還元されえない。「個」は決して等閑にされてよいものでは

ないのである（以上のことは、徳倫理的立場のみならず、功利主義への批判としても適用される）。詩集『春と修羅』の序でも言われているように、<わたくし>は確かに「現象」であって実体ではないが、「いかにもたしかにとりつづける」（2巻、11頁）のだ。しかも「風景やみんなといつしよに」（同上）、である。

さて、以上のような宇宙感覚とそれに伴う孤独感こそが、徳倫理学やケアの倫理における「情」の在り方との決定的な差異をもたらしているように思われる。例えば、ケアの倫理も感情を重視するが、それが依拠する感情は、親子関係に見られるような情愛である。一方、賢治においては、妹・とし子への過剰な愛情や父・政次郎との愛憎半ばした依存関係にも見られるように、そうした家族愛こそ、自らを小さな世界に閉じ込めてしまうカプセルでもあり、彼に生涯独身であることを選ばせた要因の一つでもあったように思われる。

賢治作品の描き出す世界は、そのパブリックイメージに反して、ある意味では非・人情の世界でもある。なぜなら、その世界は、人間のみが存在する世界ではなく、動物や植物、鉱物など様々な存在者に溢れた宇宙であるからである。それは、生き物のみが存在する、「熱」を持った世界ではない。人間中心主義どころか生物中心主義をも離脱した世界である。このことも、賢治の作品世界の基調色が「青」でなければならなかった要因の一つであろう。

家族や同朋にのみ向けられがちな愛情が、青い宇宙を通過して透き通っていき、かなしみを伴いつつ、この世界の存在そのものへの慈しみとして広がっていく。賢治の倫理における情は、そんな在り方をしている。

結びにかえて ―賢治の倫理の限界と可能性

最後に、賢治の倫理の限界と可能性について、簡単に言及しておきたい。

まず限界に関してだが、しばしば指摘されるように、また本論でも触れたように、「自己犠牲」を前面に押し出すあまり、全体主義に取り込まれていきやすい弱さがあることは否めない。加えて、ある種の理想主義的傾向ゆえか、特に功利主義や義務論と比較した場合、市民社会における具体的諸問題に対して行為の指針やルールを明確には与えてくれないという弱さも指摘しうる。

一方、現代の倫理における意義があるとするならば、賢治の思想は、この世界の存在、ひいては自分の人生の存在を深いところから肯定するような力に満ちていることである。こうした根源的な肯定の力は、なかなか現代の倫理学の視野には入ってきていないが、多くの現代的な倫理問題の根底には、こうした根源的な力の欠如があるように思える。すなわち、人生や世界の存在それ自体を肯定できないがゆえに、他人からの承認や娯楽や理念等に過度に依存したり、あるいは異他的な人間や集団を過剰に攻撃・排除することによって自我の安定を試みるといった事象が、現代社会では数多く見受けられるように思う。

賢治の作品は、そもそも倫理というものを成立させてくれているような、この世界の存在そのものの肯定の力を、<かなしみ>を湛えつつ、私たちに映現させている。

注

- ¹ 例えば、日本倫理学会の学会誌『倫理学年報』には、1952年発刊の第一集から2019年発刊の第六八集に至るまで、賢治関連の論文は一編も掲載されていない。ただし、賢治の「多面性」と「実践性」を反映してか、必ずしも倫理学の専門家ではない多分野の筆者による論考を含む、特に応用倫理的観点からの論考は、いくつか見受けられる(例えば、笠井哲「宮沢賢治『グスコブドリの伝記』における「技術者倫理」』『福島工業高等専門学校研究紀要』第53号、2012年、岩井洋「宮澤賢治の環境倫理」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』第32巻第2号、2008年など)。
- ² 国柱会と賢治との関係については、上田哲『宮沢賢治——その理想世界への道程』明治書院、1994年参照。
- ³ 小倉豊文『宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究』筑摩書房、1996年、139-141頁参照。
- ⁴ 賢治作品において、「ほんとうのさいわい」の表記の仕方は、「本統のさいわい」「ほんたうの幸」など様々であるが、本稿では、引用箇所以外、基本的に「ほんとうのさいわい」で統一する。
- ⁵ 以下、賢治の著作からの引用は『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房、全16巻、1995-2009年)により、巻数と頁数を本文中に記す。ただし、引用の際、同全集の編集委員による校訂箇所を示す[]は、削除している。また、同全集の各巻は「本文篇」と「校異篇」から成るが、「校異篇」からの引用の場合は、巻数の後に「校異篇」と明記する。
- ⁶ J・S・ミル(大久保正健訳)「自然論」『宗教をめぐる三つのエッセイ』勁草書房、2011年参照。
- ⁷ 佐藤成『証言 宮澤賢治先生——イーハトーブ農学校の1580日』農文協、1992年、115、245頁参照。
- ⁸ 「かなしみ」に着目して賢治の倫理思想を考察している業績として、竹内整一『「かなしみ」の哲学』NHK出版、2009年、139-146頁が挙げられる。
- ⁹ 賢治の宇宙観に影響を与えていると考えられる仏教思想として、松岡幹夫は、天台教学の「一念三千」論を挙げている(『宮沢賢治と法華経』昌平齋出版会、2015年、206-211頁参照)。また、正木晃は、『華嚴経』の「一即一切」「事事無碍」等の思想の影響の可能性を指摘している(『華嚴経／盧舎那仏』『宮澤賢治イーハトヴ学事典』弘文堂、2010年、157-158頁参照)。本稿が多くを負っている、見田宗介による魅力的な賢治論『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』(『定本 見田宗介著作集』第九巻)岩波書店、2012年は、華嚴思想的な存在論を重視した賢治解釈であるように思われる。